Who's who ⑨

仏師・彫刻家

長田晴鳳 49歳

芸術解剖学に基づく人体彫刻のトレーニングを15年間積んだ、というキャリアの太い骨格のひとつを、さりげなく教えてくれた。■

中野香織＝文
text:Kaori Nakano
福知彰子＝写真
photographer:Akiko Fukuchi

菩薩さまが、如来さまが、明王さまが、さまざまに身の丈や姿勢を変えて、あちらにもこちらにも、それはそれは大勢、いらっしゃる。

ありがたいような、怖いような、でもやっぱり楽しいような、えもいわれぬ不思議な光景が広がるのは、仏師、長田晴鳳さんの工房である。

仏師とは、仏像をつくる工匠である。ちなみに、お父さまの長田晴山さんは「大仏師」である。大仏師とは、本山から授与される称号である。金剛華菩薩像（仁和寺）や京都大仏釈迦坐像はじめ数々のすばらしい作品によって仏師の道をきわめ、昭和56年、大仏師の称号を授与された。平成元年には、北海道に、身の丈88メートルという当時世界最大の白衣大観音像を建立している。

そんなお父さまの仕事場を遊び場として育った晴鳳さんは、中学や高校の夏休みの課題に仏像を提出(!)したりしながら「いつのまにか」同じ仏師としての道を歩む。

工房に訪れた日には、来年のNHKの大河ドラマ「風林火山」に使われる不動明王さまが、最後の仕上げをほどこされていた。明王さまの顔は怒っているはずなんだけど、どことなく茶目っ気があって、かわいい。晴鳳さんのお顔とも、似ていませんか？

「たしかに仏像の顔は、作者に似てくるかもしれません。仏像の手も、見慣れた自分の手の形にどことなく似ることが多いですね」。

作者の仏性があらわれる……ってことでしょうか？

「それはどうでしょう（笑）。ただ、仏像のお顔にかんしては、〈厳しい表情〉〈優しい表情〉に加えて、最近、〈かわいい表情〉が増えてきているように思います」。

仏さまのお顔にも流行が？

「もちろん、時代を反映していると思います。日本人の体型の変化も映し出しているのではないでしょうか。一昔前は、お顔は大きく、体は太くしてほしいというご要望が多かったのですが、今では現代的なバランスの、小顔で細身の像を好まれる方も増えています。衣紋（衣のひだ）も、昔は凝ったものが多かったのですが、今はどちらかといえば、適度にシンプルなほうが好まれるようです」。

仏さまのファッションにも、ミニマリズムの流行が訪れているのですね。

ちなみに、「菩薩」とは本来、「修行者」のことだが、菩薩像の形は、王族であった頃（出家前）のお釈迦さまの姿がモデルとされ、装身具で飾られている。如来像の形は、悟りにいたったお釈迦さまの姿が基本とされ、「仏相三十二相八十種好」なるものの一部が像に表現される。「仏相三十二相八十種好」とは、当時のインドの人相学において「良い」とされた要素がどんどん盛り込まれていった仏相であるらしい。首筋に三道がある、というのもそのひとつ。そんな仏さまのお顔から、わたしたちは、その日の心の状態に応じて、慈悲を感じとったり、力強さや頼りがいを読み取ったりする。

表層ばかりに目を奪われるが、実は仏像をつくるときに、表層に劣らず大事なのは中にある骨格と筋肉、と晴鳳さんは言う。「中にしっかりした骨格や筋肉が入っていないと、仏像でも、頼りなく見えてしまいます。常に、中にある骨格や筋肉を意識しながら制作します。その痕跡は表には出しませんが」。

遠くから、「ああ、あの人だ」とわかるのも、わたしたちが無意識に骨格の形の違いを見分けているからであるという。晴鳳さんは、たった一枚の人物写真から立体的な肖像彫刻をつくる依頼を受けることもあるが、「後ろ姿も、本人そっくり」とほめられる像をつくるカギは、やはり写真から読み取った骨格の再現にあるという。

写真からでも骨格を読み取ることができる、その秘訣は？

有限会社日本美術研究所
〒615-0094
京都市右京区山ノ内北の口町4-4
㊐Tel:075-842-0455 Fax:075-822-3945